

宮古地域の高校生（宮古高校、山田高校、岩泉高校、宮古北高校）の
想い・考え（2011～2021年）

【セレクト5（国際支援・異文化理解）】（全10枚、30編）
（82～93ページ）

実施年度（実施した高校名）

『題名』（小論文の数 番号）（実施した高校名）

平成23年度（宮古高校）

『私が考える（できる）国際協力や支援活動』（4編 1）～4）（宮古高校）

平成25年度（宮古高校）

『異文化理解に必要なこと』（3編 5）～7）（宮古高校）

『3.11から三年目の今、私が出来ること』（2編 8）～9）（"）

『自然災害と国際協力』（1編 10）（"）

平成26年度（宮古高校）

『地球環境の保全と日本の役割』（2編 11）～12）（宮古高校）

『自然災害と国際協力』（3編 13）～15）（"）

『東日本大震災を後世に伝える方法』（2編 16）～17）（"）

平成28年度（山田高校）

『3.11から5年を経た今、私が出来ること』（1編 18）（山田高校）

平成29年度（山田高校）

『東日本大震災から7年目の今、私ができること』（1編 19）

（山田高校）

平成30年度（山田高校）

『東日本大震災から8年目の今、私ができること』（1編 20）

（山田高校）

令和元年度（岩泉高校）

『自然災害と国際協力』（4編 21）～24）

（岩泉高校）

『私ができる国際支援活動』（2編 25）～26）

（ " ）

令和2年度（宮古北高校）

『東日本大震災から十年目の今、私ができること』（1編 27）

（宮古北高校）

『私ができる国際支援活動』（3編 28）～30）

（ " ）

(※ 在籍年度・高校名・学年、氏名 ((震災当時の在籍校)・学年)、『題名』)

01)平成 23 年度宮高 3 年 E さん(宮高 2 年) 『私が考える(できる)国際協力や支援活動』

私は、国際協力や支援活動において大切なのは、「持続すること」であり、「目を向け続けること」であると思う。

そのためにはまず、発展途上国などの支援を必要としている地域の状況、問題について正しく理解することが重要だと思う。世界には、様々な問題があって、苦しんでいる人がたくさんいるということ認識することが、国際協力、支援に向けての第一歩であると思う。

次に、国際協力を行っている機構や企業について知ることが重要だと考える。その機構がどこで、どんな活動をしていて、自分が募金した場合お金はどのように使われるのかといったところまでをふまえて、責任を持ってその活動に協力する責任が私達にはあるのではないだろうか。ただ募金をするのではなく、その活動の目的や内容を十分に理解して募金後も活動に目を向けていくことこそが、本当の意味で支援・協力と言えるのではないかと思う。

そして3つ目に、一度の大きな協力も大切だが、息の長い国際協力をしていくことを心がけることが重要だと考える。まだ高校生の私達には、募金などの協力しかできないかもしれない。しかし大切なことは、できるときにできるだけのことをしていくこと、小さなことで良いから長く続けることであると思う。

02)平成 23 年度宮高 3 年 S さん(宮高 2 年) 『私が考える(できる)国際協力や支援活動』

私が考える国際協力とは、ただ物資を送るということではないと思う。お互いがお互いを助けたいという気持ちを持つことこそが国際協力なのではないかと思う。

今、世界では紛争が起きていたり、飢餓で苦しむ人がいたりたくさん問題を抱えている。そして、3月11日に東日本大震災が起き、支援が必要な人が大勢いる。大震災を経験し、人の命の尊さ、今までの自分の生活がどれだけ贅沢だったかなど様々なことを考えさせられた。中でも強く思ったことは、協力し合うことの大切さだ。避難所にボランティアに行ったおり、外国のボランティア団体も多く見かけた。その中の1人がおばあさんの肩をもみ「僕らがいるよ」と片言で話しかけていた。そしておばあさんが「力になりたいって思ってくれることが一番うれしいよ」と言っていた。私はその通りだと思った。確かに、物資の支援がとても大切で、物資がないと生きていけない人もたくさんいると思う。でも、力になりたい、助けたいと思うことが支援される側も一番嬉しいと思うし、その気持ちが一番大切なことだと思う。力になりたいと思う気持ちから国際協力は始まっていくので、その気持ちを持つことが大切だ。

世界には、まだまだ知らない問題があると思う。私は問題を知り、理解することから支援につなげていきたいと思った。

03)平成 23 年度宮高 3 年 Y さん(宮高 2 年) 『私が考える(できる)国際協力や支援活動』

私たちは、世界各国の協力があって今、なに不自由なく生活している。3月11日の東日本大震災で家を失くし、家族を亡くした。しかし、アメリカを始め、台湾や韓国などいろいろな国の方々が私たち被災者のために食べ物や衣類などの提供をしてくださった。そこで私は、今回支援してくださった世界の方々にいつか恩返しができれば良いと思い、これから私たちができる支援活動について考えた。

私たちができる支援活動に、募金が挙げられるだろう。1人1円募金すると、何も買うことができないが、それが10人、100人と少しずつでも募金すると世界の貧しい子供たちへの給食代や治療費になる。今回の震災の際に多くの方が義捐金として募金をしてくださったから、私たちは少しずつ復興への道を歩み始めている。国際支援活動は、そうした私たちのチョットした協力で、発展途上国が少しずつ生まれ変わっていくのだと思う。

あくまでも、支援活動は強制参加というものではない。「お互いに助け合い、協力し、励まし合っていきたい」という心から参加するものだと思う。今の状況は、3月11日以前と比べて恵まれているとは思わない。しかし、日本はそういった災害があっても発展途上国よりははるかに恵まれている。だからこそ、今私たちは、国際支援といった形で、世界各国の人達と協力し、助け合い、励まし合っていかなければならないと思う。

04)平成 23 年度宮高 2 年 N さん(宮高 1 年) 『私が考える(できる)国際協力や支援活動』

私は資料を読んで、取り上げられている問題のほとんどが、その国や地域だけでは改善することができない深刻な問題だと思いました。原因は環境の変化だったり人間の活動によるものだったり様々だけど、失われている自然や起きてしまった問題を元に戻し、解決するには大きな力が必要になることが分かりました。

そのように、その地域の人だけでは解決することができないことを踏まえて、私ができる国際協力や支援活動は、「世界にはあらゆる問題がある事を心に留めておくこと」と、「今の自分にできる事を探して、実行する」ことだと思いました。当たり前的事かもしれないけれど、覚えておこうという意識がなければ遠い国の出来事だとすぐに忘れてしまうと思います。そうならないように常に外国の情報を取り入れる生活をしたいと思いました。そして、国際協力といっても活動は様々なので、自分にできる事とできない事があると思います。今、高校生の自分にできる事は少しの募金くらいかもしれませんが、でも、自分のお金を世界のためにどう使っていけばいいか、そういうことを学ぶことは可能です。そして大人になってから、正しくお金を使えるようになりたいと思います。

私が考える国際協力はこのような方法です。また違った協力のしかたを見つけたときには、積極的に実行していきたいと思います。

05)平成 25 年度宮高 1 年 T さん(宮古一中 1 年) 『異文化理解に必要なこと』

今、世界には様々な文化が存在します。私達は異文化をどのように理解すればよいのでしょうか。私が異文化理解に必要なと思うことは2つあります。

1つ目は、異文化を「理解する」のではなく、「尊重し合う」ことが必要だということです。異文化を「理解する」ということは簡単なことではありません。原点に戻り、異文化を「受け止める」、互いに理解し合うのではなく、「尊重し合う」ことが大切なのです。そうすることで、お互いの異なった価値観の中で生活しているのだということを見出すことができます。

2つ目は、異文化を違う視点から考えるということです。私達はまだ自分の国の文化しか知りません。しかし、異文化を知ることによって、自分では当たり前だったことが当たり前じゃなくなったり、宗教が異なったり、別な方法が見つかったり、自分との価値観が違うことを思い知らされます。しかし、それを否定するのではなく、受け入れ、融合し合うことでもっと自分が成長できます。異文化をマイナスの視点から見るのではなく、プラスの視点から見ることで、自分のためにも相手のためにもなるでしょう。そのため、ホームステイや留学・ボランティアなど、自分の力の元になることに参加することで、自分の力も伸び、なおかつ異文化を理解する・受け入れるということに繋がっていくと思います。

06)平成 25 年度宮高 3 年 K さん(有芸中 3 年) 『異文化理解に必要なこと』

異文化を理解するためには、まず自分の国の文化を理解することが必要だと考えます。日本人は外国人に比べると自分の国の文化を知らないということをよく耳にします。実際にその通りだと思います。私は地理の授業で習うまでは、日本にどのような世界遺産があるのかあまり知りませんでした。修学旅行で行った金閣寺と小学生の時に行った平泉と、富士山くらいしか知りません。しかし、実際に見てみると、日本にもすばらしい建築物や自然があるのだということに気がきます。その感動や発見から自国のことをより知りたいとか、大切にしようという気持ちが芽生えると思います。自分の国の文化を理解できるようになれば、他文化を知った時に自分の国との違いがはっきり分かる一方で、その違いが他の国の文化の特徴であり、良きなのだという事に気付くと思います。それが、異文化を理解することだと考えます。

私は将来、外国に旅行して、日本にはない建築物や動物、食べ物などを見て、様々な文化に触れたいと思っています。そのために今のうちから日本の文化を理解しようと思っています。私はまだまだ日本のことを知りません。宮古に住んでいながら、宮古のことについても知らないことがたくさんあります。身近な場所から知り、宮古、岩手、日本、世界へと視野を広げていきたいです。そして、異文化をしっかりと理解できる人間になりたいと思います。

07)平成 25 年度宮高 1 年 O さん(河南中 1 年) 『異文化理解に必要なこと』

私が考える異文化理解に必要なことは、他国に関心を持ち、その国のことをよく知ることである。それが一番の近道なのではないかと思う。関心が薄れると、それと同時にどうしても知りたいという意欲までもが薄れてしまってしまう。

私が長崎に住んでいた頃、夏休み中であっても原子爆弾が投下された 8 月 9 日は登校日であり、被爆者の講話や原子爆弾について深く考える時間が設けられるなど、長崎県民は 8 月 9 日をとっても大切にしていた。私は、それが当たり前なのだと思っていたが、岩手に来て、他の地域では現地ほど重視されていないのだと思った。同じ日本の中でも、身近な出来事であれば意識の違いが生まれるのだ。こんなにも想いに違いがあることに驚いた。現地の人間と、離れている人との間には、どうしても想いの差が生まれてしまう。忘れてはならない現状が数多くあるのに対し、私達はその現状を知らなすぎるのではないか。また、それに対する関心の無さも問題であると思う。そのため、自らが発信源となり、辛い現状を多くの人に伝えるべきだと思う。

これは、他国との異文化理解においても共通することである。私達は、他国に勝手なイメージを持っているが、そのイメージが必ずしも合っているとは限らない。そのため、現地に行った人の講演や書物などを積極的に活用し、正しい知識を知り学習を深めることが、異文化理解において大切なことだと思う。

08)平成 25 年度宮高 1 年 S さん(豊間根中 1 年) 『3. 11 から三年目の今、私ができること』

現在、私達がすべき復興への手助けは、一番はまず「伝える」ことだと思う。アチェの地にある『津波博物館』や、『ノア方舟』で助かったガヤさんの語り部としての活動のように、後世に残せる形で伝えていかなくてはならないと思う。私は中学 3 年生の時、近い将来に大地震や大津波が来ると言われている和歌山県に、被災地の学校の代表の一人として講話をしに行ったことがあるが、やはり私達が身をもって痛感した悲しみや辛さ、震災への備え方は、できるだけ広める必要があると思う。二番目は、「切り換える」ことだと思う。アチェの人々は、大災害を神様の恵みとして受け止め、プラス思考で前に進んでいる。「日常への感謝」や「たくさんの人との出会い」は、あの災害があったからこそ在るのである。命や大切なものもたくさん奪われたが、得たものも少なくはない。そして、三番目、「返す」ことにつながる必要があるのだ。「今までの分」「これからの分」、私達が災害を経験し、学んだこと、活かしたこと、失敗したことなど、全てを他の人の役に立つように使い、恩を返すのだ。

資料を読んで、文化は違っても「思いやり」や「助け合い」の精神は、どこにでも同じく存在していることを知った。文化や国境を越えた思いやりや助け合いの輪は、無限に広がると思う。そしてそれは今、私達がやらなくてははいけないし、私達が広げていくべきだと思う。

09)平成 25 年度宮高 3 年 O さん(河南中 3 年) 『3. 11 から三年目の今、私ができること』

東日本大震災から 3 年が経とうとしている今、私にできることは、アチェの人たちのように前へ進んで生きることだと思う。悲しいことや辛いことをいつまでも引きずれば、心から笑える日は来ないと思うからだ。アチェと同じような震災を受けた日本は、まだまだ復興することに後ろ向きだと感じる。確かに、地震や津波で失ったものは大きいし、亡くなった人の命は取り戻すことはできない。思い出の品や家を失った人も大勢いて、それは、大きな傷になって被災者の心に残っているだろう。しかし、日本と同じような被害を受けたアチェでは、震災を「アッラーが決めたこと」と前向きにとらえている。その一方、原因と結果の因果関係を防災に役立てようとする気持ちは、日本より小さいようだ。しかし、復興する上で最初に大事なことは、前向きに生きようとする心を持つことだと思う。その点で、アチェの人たちは、津波の博物館を作ったり後世に伝えようと前向きに生きている。日本は、アチェから学ぶことが多い。

これからの日本の将来を背負う私達は、どんな辛いことがあっても笑顔で生きていくことが必要だと思う。アチェの人たちのように、思いやりの心を持ち、被災地のボランティアなどの参加が増えれば、復興に近づくと感じる。高校生の私たちができることは限られているが、笑顔で生きていくことで、少しでも復興の力になればと思う。

10)平成 25 年度宮高 1 年 Y さん(山田中 1 年)『自然災害と国際協力』

東日本大震災によって被害を受けた私達。その時、私達の当たり前の生活が消えました。食料は無い、物は流され無い、ガス・電気は使えないという状況でした。しかし、絶望という暗闇の中に、世界中から希望の光が届きました。私は日本国内なら可能性はあると考えていましたが、まさか国外のあちこちから支援がいただけるとは考えていなかったため、非常に驚きました。また、支援の形は様々なものでした。衣服や食料もあれば、文房具やバッグ、支援金などがありました。私が支援の中で一番嬉しかったのは応援メッセージでした。日本の国旗に、つたない漢字とひらがなで、「がんばれ！ 日本」や「遠いこの地から応援しています。笑顔を大切に」等、本当に心の奥底まで深く温かく染み渡る言葉で励まされました。ネットワーク内では、ツイッターやラインを使って日本人と外国人がコンタクトをとり合い、あの時の詳しい状況を国外に伝えることで、被害がどのようなものなのか、何で苦勞しているのかを、知らせることができました。

現在、多くの人の心が復興し始めている、または、復興に向かっている最中です。あんなにも大きな爪痕を受けたのにも関わらず、強く前に進もうと起き上がったのは、温かいメッセージがあったからです。言語や宗教・文化がどんなに違っていようと、嬉しい、悲しい、と感じるものは同じなのです。住んでいる場所が地球の裏側だとしても、人と人の心を強く結ぶきっかけは多くあるのです。

11)平成 26 年度宮高 2 年 H さん(山田中 1 年)『地球環境の保全と日本の役割』

環境問題通信を読んで、改めて防災の大切さや役割を考えさせられた。ただ災害から直接的な被害を受けないようにするだけではなく、地球環境や人命を守ることを長い目で見て考えていく必要があると思いました。

アチェでは、マングローブを植えて津波から守ると共に地球環境の保護も行っています。そのマングローブの減少は、私たち日本人に大きく関わっていることを知りました。ただ闇雲に植林するのではなく、木の性質や植林後の環境がどうなるのかなども考えて作業しなければなりません。また、日本にも防災林があることを知りました。保安林には種類があり、一つ一つの役割が異なるので驚きました。防災林は守るだけではなく、環境を豊かにしたり、津波に対して一定の効果があることも学びました。コンクリートで固めた堤防でなくても、環境を守りつつ人命も守る防災林でも良いのかな、と感じました。

これからの日本は、日本にしかできない災害対策をする必要があると思います。例えば、その地域の環境に合った防災林や、時には堤防をつくることです。海岸に植林する樹木の性質やその木の管理のしやすさ、普代村のような大きな堤防など、その土地やその土地の人の生活にも合う形で防災することが大切だと思います。そしてその一つ一つの小さなことから、地球の環境を少しずつでも良くして環境保全にも役だって行けたら良いと思います。

12)平成 26 年度宮高 3 年 S さん(山田中 2 年)『地球環境の保全と日本の役割』

今、地球上では、人間によってさまざまな環境破壊が行われている。二酸化炭素等の増加による温暖化、温暖化により氷河等が溶けるために起こる海面上昇、フロンガスによるオゾン層の破壊、等々、たくさんの環境問題があるが、どの問題にも共通していることがある。それは、人間が生きやすさを求めて科学を発展させ過ぎたことが原因であるということだ。人間は人間によって住める場所を失ってきているのだ。この問題は、今や先進国のみが考えるものではない。豊かになろうと産業に力を入れてきている発展途上国の問題でもある。日本をはじめ、科学の発展した国では、環境に配慮した産業がある程度可能である。しかし、発展途上国では難しいのが現状である。だからこそ日本は、現在ある環境に配慮した科学技術を世界にもっと広めていくことが重要である。科学の発展によって地球環境の破壊を進めてきた国のひとつである日本は、発展途上国に援助を行い、環境保全に積極的に取り組むべきである。

そのためにも、まずは日本が、今の経済中心のライフスタイルから、自然と共生し、物を大切に考える考え方へ改めるべきである。リサイクル技術の向上や、クリーンエネルギーの推進に力を入れることも重要である。いずれにしても、日本は、環境破壊を食い止める重要な立場にあるということを知覚する必要がある。

13)平成 26 年度宮高 3 年 S さん(宮古二中 2 年) 『自然災害と国際協力』

資料を読んでみて、マングローブや防災林について知らなかった役割がたくさんありました。日本で海辺にたくさん見かける松に、防災林の役割があることも初めて知りました。そして、インドネシアと日本の共通性の多さにびっくりしました。何かの巡り合わせのように、共通している部分がたくさんあると思いました。共通点がたくさんあるからこそ、もっともっと交流を深めていくべきだと思います。お互いから吸収できることはたくさんあると思うし、それをお互いの間だけで留めておくのではなく、世界に向けて発信していくべきだと思います。自然災害を完全に防ぐことはできませんが、その被害を出来るだけ少なくする訓練や努力はできます。だから、そういうような訓練や努力の仕方を世界に発信して、たくさんの人に自然災害の怖さを知ってもらいたい。人ごとではなく、いつか自分の身にも起こることなんだろうと思って取り組んでほしい。理解してほしい。インドネシアや日本だけではなく、過去に津波の被害を受けたことのあるチリやタイ・スリランカなどとも交流して、協力することができたら、さらにより良いことが可能になってくると思います。

環境問題と同じように、もっと世界全体が危機感を持って自然災害の対策に取り組んでもいいと思います。それが、いざというときに一番役に立つと私は思います。

14)平成 26 年度宮高 1 年 S さん(宮古二中入学前(小 6)) 『自然災害と国際協力』

今夏季休業中、私は 2010 年に大地震の起きたニュージーランドのクライストチャーチという都市に行きました。クライストチャーチは震災から 4 年経ちますが、まだ街は復興していません。市内観光では、被災者が座っていたというイスが並べられた所や、崩れたままの大聖堂、その代わりに建てられた紙で作られた教会などを見学しました。市役所へ行き、日本の震災についてプレゼンテーションをした後は、クライストチャーチの市長と震災についての話をしました。市長からは、震災時に日本の救援隊がとても活躍していた事、日本にもニュージーランドの救援隊を送った事、日本とクライストチャーチに同じオブジェを建てた事などを聞きました。そして最後に、「同じ経験をした国どうしだからこそ強い絆ができる。両国の関係は簡単に崩れないだろう。」と言っていました。

今まで私は被災者として支援を受けるだけでした。しかし今回、同じように苦しんだ人々と出会って私も支援をしたいと思いました。自然災害は世界どこの国にも起こりえることです。大震災を経験した日本だからこそできる支援があると思います。もし他の国で自然災害が起きた時、私も何か協力したい。そうするためにはどうするべきか、これから探していきたいと思います。苦しいのは自分だけではない、応援し、助けてくれる人がいるんだということを世界に広めていきたいです。

15)平成 26 年度宮高 3 年 Y さん(宮古一中 2 年) 『自然災害と国際協力』

2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災を経験した日本は、国内だけではなく海外からも多くの支援を受けました。予測が難しい自然災害による被害を減災するためには他の国との協力も必要なことであると思います。

インド洋大津波で被害を受けたインドネシア・アチェの人々の津波の捉え方を知り、そういった考え方の国もあるのだと初めて知ることができました。このような違いや、津波に対する防災意識、津波の記録等を、被災経験のある国同士で共有しあうことは大切な事だと思いました。互いの国での防災の方法を知ることとても良いことだと思います。アチェの人々の考え方や活動から、私たち日本は学ぶべき事もあると思います。そして、知識や技術もある日本からもアチェの人々に教えたり伝えたりすることもできると思いました。他国との協力や交流により、自然災害に対する捉え方や防災意識はきっと変わると思います。

津波の恐ろしさや、その時起こった出来事、反省、教訓は、それぞれの国にあると思います。それらを互いの国が交流しあいながら、国外と国内の人々に伝えることで、少しでも犠牲者を減少させることができるかもしれません。震災の際に必要なのは、物資だけではなく、このような国際的な交流もだと考えます。

16)平成 26 年度宮高 1 年 Y さん(宮古二中入学前(小 6))『東日本大震災を後世に伝える方法』

私が東日本大震災を後世に伝える方法として最適だと思うのは、シムル島で歌われている「スモン」のように、親しみやすい方法で伝えることだと思います。「スモン」は、韻を踏んだり、リズムカルなので、子どもでも分かりやすくなっています。そして、歌うことによって覚えやすくなっています。歌詞も明るく、避難するときに役立つものが多いです。後世に伝えるべき事は、「津波の恐さ」だけではなく、「どのようにして逃げるか」だと思います。

伝えるためには、歌をつくる他にも、「紙芝居」や「絵本」、「かるた」など、子どもの遊びを取り入れるのが良いと思います。そうすることで、小さい頃から遊びながら津波に対する知識をつけることができます。私が卒業した小学校では、実際に「津波防災かるた」というものがありました。その「津波防災かるた」は卒業生が作ったもので、小学生でも分かりやすく、内容も面白いものが多かったです。こういったものを、もっとたくさん作って、幅広い世代の人達に楽しみながら覚えてもらえれば、もっと後世に伝えやすくなるのではないかと思います。

震災から時間が経てば経つほど、人の記憶から忘れられてしまうので、後からみても分かるように、形にして残すのが最もいい方法ではないかと思います。

17)平成 26 年度宮高 1 年 S さん(山田中入学前(小 6))『東日本大震災を後世に伝える方法』

インドネシアのスマトラ沖地震大津波でのシムル島の被害者数は 7 人。これは偶然や奇跡などではなく、そこにはこれまでに後世に伝えようと努力をしてきた先人たちの想いがあったからに違いないと私は思います。ただ語り継ぐだけではなく、歌や踊りなど身近な事に託すことで、将来に伝わっていくことを大切に考えたのだと思います。インドネシアでは、津波とは神が怒って起こしたものと考える人々が数多くおり、歌や踊りが人々に親しまれやすかったのだと思います。

日本では、津波を良くないもの、暗いものと考えています。津波というと、人々は思い出したくない、悲しい、辛いと思います。しかし、それらを乗り越え、意識を変えてゆかなければ、何度も同じことをくり返し、悲しむ人々が増えていきます。それを防ぐためにも、語り継ぐということ、伝承するということは大切です。それは、たくさんの人ではなくても、子どもや孫、友達など、できる範囲で少しずつからでもできます。恐ろしさを伝えていくことは、被害を受けた私たちだからこそできる使命だと感じます。私たちが体験したからこそ、私たちにしか伝えられないものが山ほどあると思います。

建物を巡って、映像を見るだけでは大切なことが十分に伝わりません。私はぜひ、語り継ぐということ、伝承するということを始めていこうと思いました。二度と、たくさんの方が大切なものをなくさないように。

18)平成 28 年度山高 3 年 S さん(山田南小 6 年)『3.11 から 5 年を経た今、私ができること』

震災当時、私はまだ幼かった。町では煙があちこちから立ちのぼり、店や家などは跡形もなく崩れ、本来の山田町の姿ではなくなっていた。また、私はこの震災で母を亡くし、前に進むこともできないままとなった。そんな時、私を支え、励ましてくれたのが、家族、友人、他の県の方々、そして外国からの支援だ。

たくさんの方々から支援され、その中で一番心に残っているものは、手紙だ。手紙には励ましの言葉などが書かれており、そのおかげで辛く苦しい日々を乗り越えることができた。また、地域の方々ともお互いに支え合いながら過ごすこともできた。

震災から五年が経ち、私は今、高校 3 年生となった。この五年間は、長いようで短い日々でもあった。そして、私がこの五年間で一番学んだことがある。それは、人の大切さだ。私は、もともと人見知りで、人となかなか接することができなかった。しかし、多くの方々に支えられていると気づき、そこから私も恩返しのために多くの方々に助けたいと思い、一年生から三年生まで、町で行われているボランティア活動に積極的に参加した。ボランティア活動に参加したことによって、子供からお年寄りまで幅広い年代の方と接することができ、人と接することが好きになった。

元の山田町に戻ることはまだ時間がかかるけど、復興することを信じ、人のために生きていきたいと思う。

**19)平成 29 年度山高 1 年 Y さん(船越小 3 年) 『東日本大震災から 7 年目の今、
私ができること』**

私は、地学基礎の授業で津波のことについて取り扱うまでは、正直東日本大震災のことなど考えたくもないと感じていました。ですが、私達の地元と同じように津波の被害に遭ったアチェの人達のことを知って、その人達は津波の被害に遭ったのにも関わらずとても前向きだったため、背中を押されて私自身も津波のことについて向き合えるようになりました。アチェの人達と日本の人達の津波についての考え方は違って、アチェの場合は「アチャー」が引き起こしたのだから受け入れなければならないと考えていて、日本にはそういった考え方は無いけれど、津波から何年か経った今でも津波に関する伝承や教育を大切にしていることは変わりなく、仲間のように思えました。

資料を見ると、「OMOIYARI のうた」は大槌町の女性がアチェを訪ねて教えたとして書いてあり、近くに住んでいて私と同じような経験をした方がそのようなことをしていると思うと、とても驚きました。それと同時に嬉しくなりました。私の地元である山田町は建物などが復旧しているけれど、元々の元気さや活気がまだまだ不足していると感じるので、若い力で元気にしたいと思います。そして、アチェの人達が日本語をわざわざ覚えて歌ってくれているので、被災者の一人として同じように津波に遭ったアチェや、他の国の人達も元気づけられるようにたくさん支援したいし、後世に伝えられるような活動もしたいです。

**20)平成 30 年度山高 3 年 S さん(山田南小 4 年) 『東日本大震災から 8 年目の今、
私ができること』**

『グローバル山田』では、さまざまなことを学ぶことができた。私達が当たり前のように使っている水が、発展途上国の子供達は使うのが難しいこと、プラスチック等のリサイクルがそれらの国ではできないこと、学校の電気が通っていないこと、等々、当たり前には私達がしていることができない国があることに、私は驚き、そして、どういう形でもいいから支援がしたいと感じた。

そう感じたのは、私が東日本大震災の被害に遭ったとき、県内や県外、そして台湾やアメリカなど外国からの支援を受けたことが理由の一つである。ノートやエンピツ、クラッカーなどのお菓子も含めて、被災し落ち込んでいた私にとっては、すごくありがたく感じた。しかし、発展途上国で暮らしている人達にとっては、被災した状況のような環境をずっと続けているのと同じだと思った。募金をすることで、水を清潔にする薬をその人達に間接的に送ることができる援助は、すごく魅力的だし、私のような学生や小さな子供も支援に加わることができる。このような支援できる制度をもっと増やすべきだと思った。

私ができることは、そのような間接的な援助に対し積極的に参加することと、発展途上国の子供達の状況をできるだけたくさんの人々に知らせることだと思う。

21)令和元年度岩泉高 2 年 K さん(震災当時、小 2) 『自然災害と国際協力』

日本人にとってマングローブという言葉はあまり聞き馴染みが無いと思います。マングローブは熱帯・亜熱帯地域のもので、日本にはあまり生えていません。しかし、日本(日本人)は、マングローブといろいろな面に関係しています。例えば、木材や炭です。マングローブは安価で大量に販売されています。これは、世界的な流通経済に巻き込まれて起きています。また、日本に輸出され消費されるエビの 80% 近くがマングローブを破壊して造成された養殖場で生産されたものなのです。これらによってマングローブは年々急速に減少しています。

マングローブは現地の人にとって大切なものです。高波や津波から人々を守る「緑の防波堤」や海の生き物を育む「生命のゆりかご」として機能しています。

マングローブの減少は、どの地域にとっても重要な課題となっています。その中で東京海上日動が東南アジアの 9 カ国でマングローブの植林を行いました。他の企業も植林活動をしたり、誰でも植林に参加できるように協賛金を通じて行ったりしています。私達にできることは、マングローブが使われている製品の消費を抑えたり、植林に参加したりすることだと思います。

マングローブが減少したことで、大きな自然災害が生じているところもあります。その場所にいる人や生き物を守るために、世界でマングローブを守る活動をしてほしいと思います。

22)令和元年度岩泉高2年 Kさん(震災当時、小2) 『自然災害と国際協力』

地震や津波などの自然災害は必ず起こるし、止められないものだと思います。それを乗り越えるためには、その国の人達だけではなく国境を越えて世界が協力し合っていかなければならないと思います。私は、「生物」の授業で写真を見た時も、「グローバル岩泉」を読んだ時も、インド洋大津波について色々知りたいと思いました。東日本大震災や台風10号の怖さや被害を実際に体験していたからかも知れませんが、日本は地震大国と言われていますが、日本だけではなく、アジアは全体的にそうだと思います。インド洋大津波で被害を受けたアチェ州の人々は困っている人の役に立ちたいという思いやりの心があることを知りました。日本で震災が発生した時に、台湾や米国などから多額の義援金が寄せられたことに、「ありがたいな」、と思ったし、思いやりを感じました。また、あまり親しくも近くもない国々からも義援金が寄せられたことに本当に驚きました。どんなに辛く苦しくても、世界中の国々の支援で励まされ、復興できているんだなと感じたので、親しい国でも遠く離れた異国でも関係なく、国際協力は大事だと思います。

助けられたことを忘れず、これからは被災した国への義援金の寄付を積極的にやっていきたいと思うし、可能であれば現地に行ってボランティア活動に参加したいです。そして、少しでも励ましたり助けたりできたら良いなと思います。

23)令和元年度岩泉高2年 Oさん(震災当時、小2) 『自然災害と国際協力』

自然災害によって大きなダメージを受けたアチェの状況を見て、改めて津波の怖さを感じました。アチェでは、「地震の後に津波が来る」という伝承や教育がなかったため、約16万人の方が亡くなりました。自然災害にどう対処していくかは、これまでの体験や知恵を伝承していくことが必要不可欠だと思います。もし今、伝承という活動がなかったらまた同じことを繰り返すことになってしまいます。だからこそ、伝承や教育が重要だということを広めていかなければなりません。現代のアチェでは、震災の記録を残そうと「ノアの箱船」をはじめ「津波博物館」や「津波のモニュメント」など様々な形で人々に伝えようとしています。私は特に、魚を持って逃げる人の絵が印象に残りました。いつ見ても、当時のことが思い出されるような絵で、悔やんでも悔やみきれない気持ちを強く感じました。

また、アチェの人々の心の拠り所はイスラム教で、思いやりの心や笑顔もそこから発していると考えられる、とありました。辛い過去を乗り越えたからこそその笑顔だと思います。津波などの自然災害はいつ起こるか分からないので、いつ起きても大丈夫なよう日頃から備えをしっかりとっておきたいです。

アチェでは、週に3日各2回被災時の状況を語っているそうです。日本でも語り部の方々が話してくれますが、日本よりアチェの方が多いい気がします。津波の記憶を風化させないことや、津波の存在を知ってもらうためにも伝承することは大切だと感じました。

24)令和元年度岩泉高2年 Mさん(震災当時、小2) 『自然災害と国際協力』

近年において、世界全体で『持続可能な社会』の形成が注目を集めている。そのことが言われ始めたのは、最近の研究で様々な技術者たちが「限度」を提示するようになったからであろう。具体的に言うと、地球環境についてである。石油は約60年後に枯渇する恐れがあり、飲み水は2030年までに47%の人が水不足になると言われている。あくまで推定値であるが、とても恐ろしい結果である。これらの危機は1972年にローマ・クラブが提言した『成長の限界』で100年以内に地球の成長は限界に達すると言われていた。それにも関わらず、世界が『持続可能』に注目したのはごく最近である。その大きなきっかけは、国連でのSDGs採択であろう。SDGsに対し、企業や一般市民が注目を始め、2030年までに達成を目指す。

私は、SDGsを無視することほど怖いものはないと思う。企業も市民も、大量生産や大量消費・廃棄を続ける世界は、思いやりも育たないし、感謝も忘れると感じているであろう。そんな世界は、誰の目にも良い方向とは考えられないはずだ。そして、そんな想像は、私達が『持続可能』で幸せな社会を「創造」すれば改善していくはずだ。良い「想像」とそれを実行する「創造」は世界を良い方向に導くことができる。今を生きる人々は、今の生活を続けると生じる地球への影響を「想像」し、世界中で協力し「創造」していく必要がある。

25)令和元年度岩泉高2年 Kさん(小2) 『私ができる国際支援活動』

国際支援活動という言葉が高校生になってから聞く機会が増えました。私も少し興味がありましたが、学生の私にできることがあるのだろうか、という考えから自分には関係のないことだと思っていました。

調べてみると、私にもできそうなこともありました。書き損じハガキ、使用済み切手、絵本を集めたり、募金などです。書き損じハガキ集めは岩泉高校も取り組んでいる活動ですが、私は一度も参加したことがありませんでした。しかし、書き損じハガキは私が想像していた以上の価値があることを知りました。タイやラオスでは250枚で子どもが一人、一年間学校に行くことができるそうです。岩泉高校の生徒全員が一人2枚ハガキを集めれば、一人の子どもが一年間学校に通うことができるということになります。岩泉高校はとても素晴らしい活動をしていると思いますが、私たちに書き損じハガキについての知識がないため、集まりにくいのだと思いました。国際支援活動について知る機会が増えれば、書き損じハガキなどの活動に協力してくれる人も増えると思います。絵本なども貧困地域では貴重な勉強道具になります。捨てる前に、寄付しようと思います。

今回、国際支援活動について調べて、自分にもできることがあることを知りました。できることから協力していこうと思います。また、他の人にも広めていきたいです。

26)令和元年度岩泉高2年 Mさん(小2) 『私ができる国際支援活動』

私にできる国際支援は、教育の推進をすることだと思う。私は以前から教育について興味があり、世界の教育の現状を知れば知るほど教育格差や無教育の国・地域があることに驚き、解決しようと思った。

「グローバル岩泉」では、インド洋大津波で大きな被害のあったアチェについて学んだが、津波の前には無かった『伝える』ことが、今では家族や友達同士でもできている。私は伝える上で最も効果的なのは、教育の中に取り入れることだと考える。国によって様々な教育方針や意義があり、主に研究などで使うための力を養うものもあれば、道徳や保健などの生活のために必要な力を学ぶものもある。また、地元もしくは国内の伝承や記録を教えることで、防災・減災につながることもあるだろう。現在の日本は災害大国であることもあり、そのような教育は世界の中でも充実している方だと思う。

私はそんな日本の教育で育ったからこそ、伝承教育が不十分な諸外国でその国なりの伝承教育を推進していきたいと思う。NGOなど海外への派遣団として子ども達に自らが教えることもできるし、日本の教育方法を海外に伝えることもできる。自分にできる最大限のことをすることで、守ることができるたくさんの命を守り、思いやりを大切に活動していきたい。

27)令和2年度宮古北高3年 Tさん(小2) 『東日本大震災から十年目の今、私ができること』

私は、小学校2年生の時に東日本大震災に遭いました。それからもう10年が経ちます。あの時の私は逃げることに精一杯で他の人のことなんて考える余裕はありませんでした。ですが、あの日から10年。町も復興したり、発展している中で私にできることは、2つあると思います。

一つ目は、後世に伝えていくことです。アチェの人達も震災の記録を残そうとしているように、私達も震災について記録したり、語り手として内陸の人や津波を知らない世代の人に伝えていかなければいけないと思います。もし、津波の伝承や教育がなければ大きな被害が出るのは目に見えています。だからこそ、少しのことでも伝えることが必要です。

二つ目は、自分達のことを思ってくれている人が必ずいることを知ることです。震災を経験した私は、周りの人や日本人しか心配してくれていないと思っていましたが、授業で「OMOIYARIのうた」を聞いた時に、日本だけではなく世界の人が自分達のことを思ってくれていたことを知りました。その時には気がつくことのできなかつた支える力があることを知ることができました。

私は、震災の時の記憶が薄れつつあります。それでも、忘れないように時々考えながら生活しています。10年経った今の自分なら、あの日のことをもっと上手く説明できるかもしれません。伝えること、支援者のことを知ること。これは、今後も必要だと思います。

28)令和2年度宮古北高3年 Tさん(小2)『私ができる国際支援活動』

私にできる国際支援は、シンプルに募金活動や物資の支援だと思います。近年、日本以外の国でも地震の被害が出ています。何かできることがないかと考えた時、私は東日本大震災のことを思い出しました。

地震に怯える日々の中で、私の唯一の楽しみは絵を描くことでした。その時使っていた画材はゲルクレヨンというもので、海外の方が支援物資として送ってくださったものでした。今まで触れたことのない画材、そして絵を描ける嬉しさから、私はずっと筆を走らせていました。

両親の話を知ると、両親が小学生の時にも海外で震災があったそうです。その時、募金箱を作って学校中を歩いて回った、と聞きました。その頃は生徒数も多かったもので、すぐにある程度の金額が集まり、それを被災地へ寄付したそうです。そのような活動を自主的に出来るようになりたいと思いました。

自分がそうであったように、私たちの募金や支援物資を受け取って少しでも助かる人がいるのであれば、自己満足かもしれないですが、恩返しになるのではないかと思います。

立派なことを成し遂げようとするより、いち早く援助になる募金活動や物資の支援を最優先させた方が、即戦力の援助になると思います。そして、衣服や食糧だけではなく、子ども達のために画材やぬいぐるみを送ることも必要だと思います。

29)令和2年度宮古北高3年 Mさん(小2)『私ができる国際支援活動』

私は、宮古市社会福祉協議会で、使用済み切手の収集ボランティア活動をしたことがあります。この活動は、いわて車いすフレンズ活動の一環です。アジアの国々では車いすを購入することができず、日常生活に困っている人達がたくさんいます。その方達に少しでも役立ちたいという思いを込めて、地域内で使用されなくなった車いすを修理・整備し、アジア諸国へ寄贈するボランティア活動です。整備された車いすは、海外へ運ぶ前に、いったん倉庫がある茨城県に保管され、その後国内の空港や船着き場に運ばれます。空港まで運ぶ費用は、車いす1台約2千円です。また、手荷物扱い以外に、数十台まとめてスリランカなどアジア諸国へ空輸する場合は、輸送費の負担が多くなります。そのため、使用済み切手や書き損じハガキを収集し換金し、それらを国内輸送費用の一部に充てています。この活動の目的は、活動の主体となる青少年にとって、車いすを修理・整備し、寄贈を通してアジアの国々の人達との友情を育み、福祉教育や国際交流のきっかけにしたいことです。

私のボランティア活動は、微力かも知れませんが、自分の活動の先には必要としている人がいることを自覚しながら、今後も私ができる国際支援活動として、使用済み切手の収集ボランティア活動を続けていきたいと思っています。

30)令和2年度宮古北高2年 Hさん(小1)『私ができる国際支援活動』

～学生にもできる国際協力～

世界では私たちが知らない様々な問題が起こっている。そこで私たちができる国際協力として、まず「知る」ことが大切だ。問題は認知されて初めて、問題となる。どれだけ忙しい学生でも、スマートフォンを使うことで、世界各国の情報を収集することができる。しかし、終えてはいけない。収集した情報を家族や友達に伝えたり、SNSでシェアするなど、身の回りの人達に国際協力の輪を広げていくことも、学生にできることの一つである。

文化祭で、国際協力に関する展示を行うことも学生にできることだと思う。文化祭は、生徒や学生だけではなく、地域の方や保護者、外部の方が多く訪れる。そこで、国際協力に関するポスターの掲載や世界中の様々な問題を解説する展示を行い、同時に募金箱の設置をする。この取り組み自体が、一つの国際協力に繋がるのではないかな。

しかし一番大切なのは、毎日の消費行動を改めることだと感じる。個人的に海外で国際協力に携わるよりも大事なことも知れない。人権や環境、途上国の労働環境に配慮した商品を積極的に購入する。自分の目の前にある商品が、どこで、誰によって、どのように作られ、どのように運ばれてきたのかをよく考えてみることで、少しぐらい高いお金を出しても、環境や人権に配慮したフェアトレード商品やエシカル商品を購入していくこと。このようなことを意識するだけでも問題を根本的に解決する事が可能であり、学生にもできる立派な国際協力だと思う。